関西紀行その一

生駒連山を越えて

山本秀男

真新しい地下足袋の紺があざやかに眼にしみる。女は灰色の巾広なタイトスカートをはいていたが、その地下足袋と肩にふりわけた風呂敷包の小さな荷物とが奇妙なコントラストをなしていた。その服装は、この山が決して深くないことを示しているようでもあつたが、道が安易な状態でないことも暗示していた。そんなせんさくはともかく、年は四十にもなろうその女が、この山道ではひどく印象的であつた。その頃私たちはアゴを出しかけていたので、なおさらそう思つたのかも知れないが、女と口をきいてみたいという軽い衝動にかられていた。

女は地下足袋でかためた足を一歩一歩たしかにふみしめながら下つてきた。

「どこまでいきなさる?」

「信貴山まで」

「だつたら南にまわればいいに、むこうからいけば信貴山に上れんこともないけど、ここからでは高安山に上らねばならんし」

「それは百も承知なんですがネ」

「でもひどい道でつせ、つい最近まではいい道でしたが、いまは信貴山のほうが道がよくなつてしもうたので、この道は廃道になつてしまいましたネ」

「それにしても、貴女はなぜ、この山道を歩くんですか?」

「ケーブルがなくなつたから、仕方ありませんね。あんた方戻られたほうがよろしいと思いますがなー」

「そうですかなあー」

正直にいつて女のいうことは偽りだとは思えなかつた。何故なら、最后の人家のそばにいた老人が、今井氏に地図を出させて道を説明していたことが、すでに思い出されていたからである。爺さんはいつていた。

「五万分の一でなきやわからんで」

つまり廿万分の一の地図では、この山の中腹に長い間暮してきたにもかかわらず、いま私たちが歩いている道が見つからなかつたのだ。自分ではよく歩いていても、その道は、他の大きな道と違つて地図に見出すことができないのである。それは、とうてい自転車では無理だということを裏書きしているようなものだつた。あえてこれに逆つたのも、たかが四〜五百米の山だと思つたからでもあつた。だが、女のいうことを信用しないでもすむことなら信用したくなかつた。いや女のいうことが、女の弱い足を基準にしたものであればよいと願つた。第一、これほどの山ぐらい越えねばならぬという気負いが何といつても私たちにはあつたのである。

「戻られた方がよろしいと思いますがな」

と女はもう一度いつた。

「でも登つてみたいんで」

「それじや仕方ないけど、それにしても目的は何や?、自転車の宣伝?」

女にしてみれば、どんな素晴しいクラブモデルでも自転車は自転車である。その自転車を押してこの山の廃道を登るのは理解に苦しむようだつた。

「旅行が目的」

「へえ、御苦労さんやなあー、あと三分の二登らねばなりませんぜ。マ、気をつけていきなはれや」

「有難う」

女は、再び地下足袋のあざやかな足をゆつくりと運びながら、下つていつた。

道はそれからますますひどくなつていつた。あとで五万分の一の地図を見たのだが立石越と記してあるところをみればかつては重要な道の一つであつた筈である。それがなぜこんなに悪くなつたか不思議なくらいである。やわらかい土は水でえぐられ、岩石がみにくく露出している。しかも急勾配だ。そんなところをクラブモデルを押してあがるのは、どうみてもまともではないかも知れない。いかに一四・二三kgのクラブモデルでも、またツーリングタイプの八段変速でも、歯がたたない。なによりも心構えが悪かつた。このような道を登るための、心構えというものの持ち合せがなかつたのである。何回もの休憩で私たちは紳士から下着一枚のあられもない姿に堕ちていちがいない。たとえ小いさな山でも、山と名のつくところへは、そうむやみには踏みこまないだろう。大体が大阪を基地にして法隆寺、斑鳩の里から葉市寺、そしい話である。

だが、それほどにその日の二人はいつもと変つていた。なんといつても嬉しかつたことは、今日という今日こそ

た。身だしなみを保つには　それ相応の条件のいることを馬鹿々々しい思いで知らされていた。

「フロントディレイラーさえなければネー」

思えば随分ぜいたくな述懐であるが、つい口に出てしまつた。おそらく三段変速だけだつたら大和街道を南にまいたにちがいない。たとえ小いさな山でも、山と名のつくところへは、そうむやみには踏みこまないだろう。大体が大阪を基地にして法隆寺、斑鳩の里から薬師寺、そして奈良から京都へというのが今日のコースの予定であつたのだから。大変なアルバイトを試みたものである。

「フロントディレイラーが災いした話か…」

先輩がきいたら、不肖の後輩をもつたものだと嘆くに違いないが、ついにそんな言葉も出た。誰が考えたつてフロントディレイラーが悪いのではなく、二〇万分の一の地図だけで歩いているほうが悪いのである。始めてのところを走るのに五万分の一をもたなくてはならないということを、ふだん新しくサイクリングをはじめる人に教えているくせに、それを自分で守らないで、五万をもたぬために災いを味わうということは、まことに羞しい話である。

だが、それほどにその日の二人はいつもと変つていた。なんといつても嬉しかつたことは、今日という今日に限つて、二人がどこをどう走つているか、全国のといへば大げさだが、知つている範囲のサイクリストの誰一人として知つていないからである。雇れリーダーのときは言わずもがなとしても、クラブランでは勿論のこと、プライベートランでさえ、大ていの場合、彼は今日どこを走つているかが、誰かに知られている私たちである。些細なことだが、子供のように嬉しくてたまらなかつた。だから大阪の日本橋の宿での打合せでも、

「信貴山（しぎさん）という名前が気に入つたから寄つていこう」

という具合で、年甲斐もなくうきうきしていた。そして今里の十字路から初めて生駒連山がみえたときは、簡単にあれ

JCA推薦才1号車
ALPS
¥ 30,000
附属品
四段変速・バッグ
インフレーター
ランプ・タイヤレバー
カタログ呈（8円）

アルプス・クラブマンニュースの真価はベテランサイクリストにお聞き下さい
オーダーメイドの車
Clubman Ace
資本金
会社　萩原商店　東京都千代田区神田多町1-7　TEL (25)2288